

飛騨農林事務所の普及活動状況（令和5年10月31日現在）

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■ほうれんそう 雇用の確保に向けたポスター・動画の撮影を支援

10月6日、飛騨野菜出荷組合ほうれんそう部会では、労働力の不足を解消する目的で、作業を紹介するポスター及び動画の撮影を実施した。

作業を初めて経験する従業員が、調製や箱詰め、収穫の作業を先輩の従業員らに学ぶ形式で、動画づくりが行われた。

今後は、出来上がったポスター及び動画を活用し、雇いを確保するための活動を実施する予定である。

農業普及課では、飛騨野菜出荷組合ほうれんそう部会と連携し、雇いの確保に向け支援していく。



【収穫の作業を撮影】

■青年農業士 「ひだファーマーズミーティング」を開催

10月20日、「ひだファーマーズミーティング」が青年農業士連絡協議会飛騨支部の主催により高山市で開催された。

若手農家や新規就農者が、地域や品目を越えた仲間づくりや情報交換の場として年1回、開催しており、7回目となる。グループで、不安や販売の方法、経営の内容を語り大いに盛り上がった。

参加者は「他の品目の生産者との交流により、視野を広めることができる。今後も続けてほしい」と話した。

農業普及課は関係機関と連携しながら青年農業士の活動を支援し、担い手の育成につなげていく。



【地域や品目を越え語り合う】

■清見荘川・高山南ほうれんそう部会 研修会を開催

10月19日、JAひだ高山営農センターにて、清見荘川・高山南ほうれんそう部会合同プロジェクトチームの研修会が行われた。会員6名を含む10名が参加し、農業普及課が講師となり、ほうれんそう白斑病及び労働力の確保について学んだ。

多くの質問がなされるとともに、参加者が互いに議論し、ほうれんそうの病害および今後の労働力の確保に向け知識を深めた。

農業普及課では、今後も部会の活動を支援し、担い手の育成につなげていく。



【質疑応答を行う参加者】

安心で身近な「ぎふの食」づくり

■大麦 は種が始まる

飛騨地域における大麦の栽培は、高山市荘川町や白川村などで行われ、地元を中心に加工されている。

高山市荘川町では、営農組織が、そばの刈取りを終えたほ場で10月11日から大麦のは種を開始した。品種は「ファイバースノウ」で、一週間ほどで一斉に出芽し始め、生育は順調である。

農業普及課は、今後、積雪の前後の生育を確認しながら、高品質に向け、追肥の量やタイミングの判断や、病害虫の防除の確実な実施を支援していく。



【発芽した大麦】

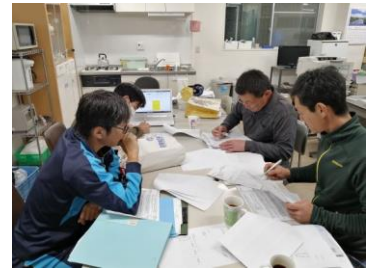
ぎふ農畜産物のブランド展開

■夏秋トマト 団体でのGAPの取組みを支援

「丹生川蔬菜出荷組合トマト部会天空のめぐみ班」は、大手量販店のプライベートブランドでの販売など、付加価値の高いトマトを作っており、年1回、販売先による外部監査を受けている。

10月12日、新たに班への加入を希望する2名に対し、外部監査を受ける班員の帳簿等を見本とし、整備すべき書類について説明会が開催された。

天空のめぐみ班は、ぎふ清流GAPにも取り組んでおり、来年度、更新を控えている。農業普及課は、リスク評価の実施等GAPへの取組みを引き続き支援していく。



【書類の整備を支援】

■果樹 令和6年版 防除暦の編集会議に出席

10月25日、飛騨農業振興会では、毎年1月に発行している果樹病害虫防除暦（もも、りんご、なし）の編集会議を開催した。

農業普及課が作成した資料に沿い、各種の病害虫に対処するための薬剤の選択や記載の方法等を検討した。令和5年はリンゴ褐斑病が多発し、問題となったため、重点的な変更を行った。

今後は、JAひだ果実出荷組合協議会役員会において、変更案を検討し、12月末の完成を予定している。

農業普及課では、関係機関と連携し、技術情報の提供や気象データの収集、防除暦の作成等を実施し、生産者を支援していく。



【来年に向け防除暦の話合い】

■夏秋トマト データ駆動型農業の現地検討会を実施

飛騨夏秋トマトスマート農業協議会では、国の事業を活用し、スマート農業機器を用いたハウス内の結露対策に取り組んでおり、10月から10ヶ所で実証を開始している。

10月31日、協議会のオブザーバーを務めるハウス内の環境制御の専門家を招き、現地検討会を開催した。自動換気と送風を組み合わせた試験を実施しているほ場を視察し、調査の方法等について助言をいただいた。

農業普及課では、今回の助言も踏まえ、現地で実践できるスマート農業技術の検証・普及を今後も進めていく。



【オブザーバーとの意見交換】

地域資源を活かした農村づくり

■稲WCS 朝日地域で現地研修会を開催

10月24日、高山市朝日町で稲WCS（ホールクロップサイレージ）の研修会が行われ、生産者と関係者15名が参加した。

講師に竹林農業革新支援専門員を招き、朝日町で初めて栽培された品種「つきすずか」を見ながら、熟期の遅さや穂の長さなど特徴を学んだ。農業普及課からは生育の経過を説明した。

今後も稲作農家と畜産農家がともに満足できる稲WCSの生産に向け、支援を行っていく。



【「つきすずか」を見て学ぶ】